若越郷土研究
41の2

肥後からの福井藩留学

山下　英一

明新館お雇い教師グリフィスの福井滞在日記に次のような記述がある。それは肥後から来た人物に関する記録であるが、ここにそのすべての箇所を抜書きする。一九七一（明治四）年の五月二十日（陽暦）から始まる。「沼川の友人で肥後出身の青年が礼を云いにやって来た。」（以下、この小文の英文からの日本語訳はすべて筆者の拙文である）

五月二十一日。夜、肥後出身の紳士四人が来て、夕食を共にし楽しかった。

五月二十五日。朝、実験をして、肥後出身で沼川の友人をよろこばせた。

五月二十九日。夜、山の坂の店で、肥後紳士の供応があって、学校から役人四人、三岡、肥後人四人、芸者七人が集まった。

六月二日。ルセー氏と散歩に出て、肥後紳士を訪ねた。

七月二十七日。夕食後、二人の肥後人が訪ねて来た。

八月七日。夜、肥後人と渡辺ともう一人が私の家で食事をした。

十月二十六日。「ひげのある肥後」が夕食に来た。「ひげのない肥後」が父の死によって国許に呼びもどされた。ひげの肥後からそうめんをもらった。

十二月八日。岩淵、中野、本山が病気になった。

十二月十日。吐酔、大岩、肥後と新約聖書を読み、その後、カール、吐酔、本山と讃美歌百三番、百四番を歌った。

一八七二（明治五）年一月十九日。夜、キリスト教について肥後と長いこと話した。

以上の記述から確かに肥後からの留学生があった。こういう他藩からの留学生はグリフィス日記を見る限りでは異例であり、筆者の興味もそこにあった。手短に云うと、この留学には五月二十日に記載の「沼川」という人物がいて、その沼川の推薦によるものであった。となると話は分り易い。沼川（三郎）は留学先のアメリカでの変名で、実は横井小楠の兄時明の次男で甥の横井大平である。沼川は兄の伊勢佐太郎（横井佐平太の変名）と共にニュージャージー州のニューブランズウィックという町の学校で慶応二年から学んでいた。同じ町のラトガース・カレッジに在学中のグリフィスはこの最初の日本人留学生に関心を持った。明治二年当時二十六歳のグリフィスは六歳年下の沼川が肺病のため帰国せざるをえない状態を知っていた。

肥後からの留学生の数はグリフィス日記では確定できないが四、五名になろう。グリフィスが『日本に於けるラトガース卒業生』（一九一六年改訂版）のなかで、「熊本から沼川は数名（*several students*）の学生を勉学のため、福井に送った」と記録する。このこと

は在米中の沼川がグリフィスと知己の間柄であったことを裏書きしている。またグリフィスには沼川がいつまでも沼川であって、横井大平にはならなかったように思われる。

次にこの留学生派遣についてフィラデルフィアの姉マーガレット（マギー）宛の手紙から引用すると、（一八七一年三月二十三日付とあるのは、五月二十五日付の誤記であろう）

日曜日の夜、いっしょにお茶を飲んだ四人は私の米国でのなつかしい生徒の親類です。彼等は六百マイル離れた肥後の国から福井に住み、私と勉強するためにはるばるやって来ました。肥後にも外国人が居るのに。憶えておいでですか。ニューブランズウィックで私の卒業式の翌日に、クーパー教授が私達を訪ねて来られた時、沼川という日本人が病弱のため日本に帰国するところだといって訪ねて来ましたね。あの沼川がかわいそうに肺病にかかり、咳がひどくて手紙も書けなかったのですが、私が福井に来ていると聞いてすぐに福井へこの三人の生徒をよこしました。二、三日前にも、沼川は私への感謝の言葉と親切な思い出を言付けて、もう一人親類の者をよこしました。

そのもう一人の肥後青年が挨拶にグリフィスを訪ねた五月二十日、熊本では沼川（横井大平）の病没という悲運に見舞われた。重病を押しての尽力の効あって、熊本洋学校に米国人教師ジェーンズ大尉の招聘も決まり、九月開校を目前にして二十一歳の死であった。福井に送られてきた肥後の青年はおそらく沼川と心の通える好学の徒であったと思われるが、病苦のなかで弱冠二十歳の沼川が洋学と藩の教育にたいする情熱を燃え尽さんとしたその気力に圧倒される思いがする。精神の問題は分かるとしても、留学の費用はどうまかなったのだろう。私費かそれとも藩費かの問題もある。また数名の肥後人の名前が分からないが、そのことでは先述の日記にわずか一名、*Motoyama*（本山？）の姓を見るのみで、この青年は藩が建てたグリフィスのための洋館に住込の幸運に恵まれていた。これについてグリフィスの手紙と照合して見ると、

十月二十八日付マギー宛

家には今、かなりの家族がいます。本多、大岩、中野（大岩と中野は私の助手）が一つ部屋に、他の部屋に笠原（カールと呼んでいます）、本山、吐酔がいます。笠原は目のキラキラした可愛い少年で、頭が良くてとても礼儀が正しいです。本山は三百マイル（筆者注。五月二十五日付の手紙では六百マイルとなっているが、六百マイルが正しい）も遠方の肥後から、私に学ぶために福井に来ました。私が以前、米国で教えた生徒の一人、沼川（一八六九年、ニューブランズウィックで姉さんも会っている）の推薦です。吐酔はすばらしく頭の良い、まだ十五歳の少年で、女の子のようにおとなしく、ダイヤモンドのように光り輝く美少年です。

五月二十五日付と比べて肥後から来た青年の記事で明らかになったのは、他の肥後からの留学生の動静は知る由がないが、少なくとも、この青年はグリフィスが藩校教師を辞して福井を去る日までグリフィスの館での生活を共にした。そして一月十九日のグリフィス

の日記にあるキリスト教についてグリフィスが本山に時間をかけて語ったという一行は重要な意味を持ってくる。これについては横井小楠とキリスト教、熊本洋学校のキリスト教化との関連で述べることになろう。同じ日記によるとグリフィスは一月二十二日、雪がはげしく降り、風はほとんど横殴りに強く吹くなかを、福井から出て行くのだが、見送りの人たちと府中で別れた一行四人のなかに肥後の青年本山の姿があった。この小文ではこれ以上本山の身元や生涯などについて述べることは調査不足で今のところ差し控えたいが、考えられることは沼川がグリフィスに期待したことが西洋知識とその背景のキリスト教及び武士社会の道徳に代る新しい宗教的道徳の修得であった。グリフィスもまた沼川の友情と期待に応えて肥後留学生を処遇したと思われる。グリフィス日記にある肥後からの紳士の記述に何か意味を感じたのは、こういうことであったと感慨にふけるのは筆者だけだろうか。しかし沼川の推薦で送られてきた留学生がグリフィスから個人教授を受けたのか、それとも、明新館に入学を許可されてグリフィスの授業を受けていたのかは判然としない。

(一)

横井大平が変名を使って米国へ留学する前に福井に居たことがあった。山崎正董著『横井小楠　伝記篇』（昭和十三年　明治書院）によると、文久二（一八六二）年、福井藩から、招聘を受けて、肥後藩より四度目の越前行を命じられた小楠は甥大平を同伴した。しかし福井行の途中に春嶽からの特使で江戸へ赴くことになったが、大平は福井へ直行して同行の内藤泰吉らと二十日福井に滞在した。江戸では小楠の意見を重んじて春嶽は政事総裁職の就任を決意した。その後、出府した大平は江戸霊岸島にある春嶽の越前藩別邸、後に、常盤橋の越前邸に滞在中の叔父小楠と起居をともにし、英学修学のため毎日そこから幕府の洋書調所に通っていた。その年の暮れ、小楠は肥後藩士二人と酒宴の最中刺客に襲われ、藩士二人は手傷を負ったが、小楠は無手であったためその場を脱出し、越前邸に帰って押っ取り刀で引返したが暗殺者たちの姿はなかった。小楠を開国論者の首謀者とみなした攘夷者たちの行為であった。しかし賊に立向かわず、友人を死地に残して脱出したのは武士に有るまじき振舞で士道忘却であるとの非難が肥後藩に起った。小楠の處置について、肥後藩と福井藩の間で意見が交された結果、小楠の身を危ぶんでその身柄を福井にまかせることになり、やがて小楠は年内に無事福井に着いた。そして小楠出発の四日後に大平が江戸を立って文久三（一八六三）年、正月に福井に着いている。大平の二度目の福井訪問であり、しばらくして兄左平太も熊本から福井の小楠の許を訪ねることになる。

山崎正董著『横井小楠　遺稿篇』の書簡、一四四　宿許へ（文久三年三月二十日小楠在福井）には「左平太、大平は今暫此許に留置申候」とあり、さらに「左平太、大平は大に心も附き此節は一段上り申候。朝晩咄合大分了簡も付き大に悦び申候」と書いて自宅の養母（至誠院）と妻（つせ）を安堵させている。「心も附く」とは左平太、大平が小楠（義父）に心服して従いてくる、「了簡も付き」とは考えが成長したことを表す言葉であろう。大平が江戸を出発する前日の夜、春嶽は大平を引見してねんごろ

に慰労の言葉をかけ品物を恵んでいる。「大平へは別て御懇にていくつに相成哉、立って見よと被仰候間則立申候へば殊之外大男と御ほめ被成候」（「遺稿篇」書簡一四〇　宿許へ　文久三年正月十二日　小楠在福井）当時十三歳、大きな体格の大平を春嶽は頼もしい少年と思ったのだろう。これを書いている時の小楠のうれしい顔が想像できる。安政一（一八五四）年、小楠は兄時明の病死に遭うが、左平太、大平の幼弱なため、順養子となり横井の家督を相続することになった。それだけに兄弟に掛ける小楠の責任と期待は大きかったに違いない。

二度目の大平の福井滞在も短期間で、兄左平太ともどもやがて国許に帰される。元治一（一八六四）年、小楠はこの二人の甥を海軍々事修業のために神戸の勝海舟の塾に入れたが、それも廃止になって、長崎のフルベッキのもとで英学を修業していたが、慶応二（一八六六）年、フルベッキの配慮を受けて、左平太、大平は渡米する。その留学中に小楠暗殺の凶報に接した兄弟の悲憤はいかばかりであったか。明治二（一八八九）年、小楠六十歳を迎える年であった。

以上は大平を中心に福井との因縁浅からぬ事跡を先述の山崎正董著『横井小楠』に大いにあずかって記したものだが、その千三百頁になんなんとする「伝記篇」のおよそ三分の一は福井藩のため国事に奔走する小楠を確かな筆致でまざまざと再現して、その人となりをクローズアップしている。それはまた小楠の思想の及ぶかぎりの事項は書き残さんとの情熱も感じられて、その一つにこのような記述を見る。

右ラットガース大学は合衆国ニューゼルシー州のニウブルンスウキックに在るが、同大学の卒業生ゼームス・エチ・ハラーは文久元年に宣教師として、ロバート・エチ・ブルンは同年公使として、ウイリアム・エリオット・グリフキス、エドワード・ワレン・クラーク、マーチン・ネビウス・ワイマック、ヘンリー・スタウトの四人は明治の初年教師として、泰西文明と接觸して間もない日本に来り文化事業上に重要なる役目を演じた。

肥後藩からの留学生が横井大平の遣わした青年たちであったことから、福井藩と小楠を通して、大平との因縁と、福井藩招聘のアメリカ人教師グリフィスと大平の師弟の間柄について考えてきた。そしてその留学生がグリフィスから、個人教授を受けたか、藩校に入学してグリフィスの授業を受けたかのどちらかについてよく分らないと書いた。しかし熊本洋学校の創立とアメリカ人教師招聘の立役者の大平が福井藩のグリフィス招聘は熊本より一足早い、というより先進的であるとの判断から、おそらく福井藩の洋学を直接に学ばせる内地留学の考えがあったと思われる。大平にとって福井藩は春嶽の人格のもとに他藩の学者で養父の小楠、そして自由の国アメリカから師のグリフィスの二人の先覚者に、藩の青少年の教育のための指導を懇請した先進藩であった。その藩の学校がはたして大平の期待したような完全に洋風化された様式と内容を備えていたかというと、あまりに大平らの理想とする洋学校とは異っていた。確かにグリフィスの教育はアメリカの大学の理化学実験室をモデルにした器具、薬品などを輸入

した授業で青少年を瞠目させるものであった。しかしグリフィスはあくまでも雇いの立場であり、学校役人は公私にわたってグリフィスの要望を満たしてくれたが、福井にアメリカ式科学校を設立したいというグリフィスの希望の実現よりもいわば和洋折衷で武士教育と洋学の両面を土台にした藩の教育方針のもとで、少くとも福井滞在の間のグリフィスは単なる理化の教師に過ぎなかった。

(二)

ここに於て横井大平の目指した洋学校とはどのような学校で、またどのような教育が施されて、青少年にいかなる感化が起ったかについて知ることにしたい。さいわいカリフォルニア大学で歴史を教えるノートヘルファ教授が一九八五年にプリンストン大学から、*American Samurai — Captain L.L.James and Japan* を出版している。これは熊本洋学校の教師として招聘されたアメリカ人ジェーンズの伝記であり、洋学の振興を教育の理念にしてきた横井小楠や、ジェーンズと同じくフルベッキの斡旋で福井藩に来たグリフィスにも記述が及んでいて興味深い。

小楠が標榜した知識を広く海外に求める教育に賛同して、藩の教育制度の根本的改造の声が高まった。それは藩の青少年に西洋の富国強兵の秘伝を教える学校の必要を痛感する声であり、その上に立って日本国ばかりでなく郷土熊本もまた安定するというのである。

一八七〇年夏には洋学局が熊本に設立されていた。この役所のもとで新しい二つの学校が計画された。最初は医学校で、西洋医学の技術を学び内科と外科の医者を育てる。二番目は洋学を全般にわたって修める洋学校の設立で、そこで望まれることは熊本のためになり、日本国の水準も高める洋学者を育てることにある。この予見の通りに二つの学校は西洋人教師の監督の下に置かれることになった。洋学校の場合はその教師はアメリカ人でなければならないという一層の確信があった。

大平はあくまでもこの意見を主張し、一八七〇年夏、病気を押して上京してフルベッキ（当時、大学南校教頭）と面談、洋学校に適したアメリカ人教師の人選を依頼した。適任者ということでは小楠のいう人格の育成を教育の重要な仕事とみなす考えに従って、求められる西洋人の教師は理想の高い、人格の立派な人でなければならなかった。大平の考えを支持して、フルベッキがオランダ改革派教会の伝道局主事フェリス宛に出した手紙では、日本各地に正しいキリスト教徒を派遣すれば、日本のキリスト教化という改革派教会の主な目的に有効な支援をもたらすと書く。

洋学校の授業はすべて英語だった。ジェーンズは日本語に全く好意を抱かなかった。通訳の使用はのろわれるべきことであった。世界中から最高水準の学問を習得するには、その手段として英語の精通に恵念する以外にないとジェーンズは考えていた。英語の教科書に『マガフィー・リーダーズ』を使った。この教科書のなかの異なる道徳的教訓を持つ一つの簡単な話によって少年たちは初めて西洋思想と接触していった。英語のスペリング、文法、リーダーの初年から学生は地理、歴史、数学基礎を二年で、代数、幾何、三角法、測

量を三年で、物理、天文、地質、化学、生理そして英文学と学んで行った。二年まで土曜日は作文、会話、朗読、演説に当てられた。

廃藩によって学生の東京、横浜への脱出（*exodus*）を招いた福井と違って、肥後の王政復古は反対の影響を与えたようだ。熊本の学生は好むと好まざるとにかかわらず、元の城下町に参集して、国情のなかでの学生自体の顕在のみが郷土の顕在をも復元する責任を負う覚悟であった。同時に学生は地方政治の限界を越えた国家の危機感をも共有した。

一八七四年の終りに催された最初の契約の終りを記念する宴会で学生、父母、役人の客を前にした演説で、ジェーンズは洋学校内の仕事の間に自分に対して熊本の人々の尊敬と愛が着実に芽生えていたと語っている。他方、学生にいつまでも深い印象を与えたのはジェーンズの真心（*sincerity*）であった。熊本への招待と調和するようにとジェーンズが決心した最良の活動方法は純粋に教育と、それに学生との密接な人間関係の創造に没頭することであった。だから最初の三年は学校の内外でキリスト教を論じようとはしなかった。学生をキリスト教に導く努力は次に述べるように間接的方法の形をとった。

より高い力、自然の秩序と美、宇宙の広がり、歴史の進行を明かす証拠を学生の身の周りの世界の中で力説しながら、人間の運命を教える神の力の存在を学生に呼び起した。

一般に学生の気をおこさせたのは、社会的地位の喪失感よりもむしろ以前の価値構造の崩壊に起因する道徳の極度な混乱を（*dislocation*）を感じだからであった。学生のなかにはその極度な道徳の混乱状態のあまり孤独に陥り、これまで自己を律してきた道徳感覚の次第に欠如してくる者がでてきた。こういう学生に必要なのは儒教に替る何か生きた霊感であった。これがあればまたもとの完全な人間になって、使命感を取り戻し、洋学校で習った知識をより広く社会や国家の利益のために有効に活かすことも出来ると学生は願った。学生の自発的な声を知ったジェーンズは時機をみて毎週土曜日の夜の自宅での聖書研究を開始する。この集会に一八七四年末には六十名の学生が集った。翌年の秋には三時間にもわたる日曜礼拝があったという。学生の多くは初め好奇心とキリスト教のあらさがしが目的で出ていたが、ジェーンズの真心（*sincerity*）に感化されて行った。やがてジェーンズは日本に精神革命（*a spiritual revolution*）の必要を強烈に主張するようになった。

日本に必要なのは教育者よりも「真理の光」の牧師や教師である。科学と文明の名による威厳のもとに、西洋の実利主義の薄膜から作られた偽の文明は、精神とそれに必要なものすべてが提供されないままでうつろなあわになって早晩、破裂するだろう。

肥後で経験した五年の生活はジェーンズにとって「異郷に身を置いてただ努力あるのみ」（*exile and effort*）のドラマであった。

そして真理、正義、自由、精神を満足させる大きな知恵といった原理を中心に日本がその精神の変化をとげることの必要を強調してジェーンズは妻と任期満了の肥後を離れた。そして熊本洋学校も廃校になった。

ノートヘルファ教授のジェーンズに関する文章からグリフィスを念頭に置いて興味のある観点を引用してみた。そして何よりもうれしい発見はジェーンズもまた熊本の人々から愛され尊敬されるようになったことであった。教授によるとそれはジェーンズが誠実な生活（*a life of sincerity*）を送ったからであった。同じことが同時代の福井のグリフィスについても云えるのである。ともに首都から遠く離れた地方の生活を'*exile*'と呼んでいる。授業はグリフィスが通訳付きで化学と物理が中心、ジェーンズは全寮制の学生に英語により諸教科を教え、英語のテキストはオハイオ州出身のジェーンズにふさわしいマガフィー・リーダーズであった。何故ならこのリーダーはオハイオ大学学長で聖職者のマガフィーが書いて、キリスト教道徳を大いに盛った当時のアメリカで最も人気のあるリーダーであった。フルベッキが世話をして伝道局からは日本に送った教師の一人、グリフィスもまたキリスト教徒として、控え目ながらも自宅に学生を同居させて毎日曜朝の礼拝をしていた。他方、教室で、キリスト教のことは一言も云わなかったジェーンズが、学生から言い出すのを待って、自宅を開放して聖書を読み始める。廃藩によりそれまでの武家社会を支えてきた士道が崩壊した直後に開校の洋学生の精神は混迷していた。しかし福井の場合は同じ状態のもとで藩校の優秀な学生が続々と退学して行く、いわゆる脱出（*exodus*）の事態が生じて学業の混乱が始った。熊本と福井のこの大きな違いはどこに理由があるのだろうか。しかも春嶽の福井藩の政治に小楠が参与していた。その小楠の甥の大平が中心になっておこした洋学校からジェーンズと聖書を読む学生の集会が生れて、やがては小楠の子、時雄を中心としてキリスト教を奉じるいわゆる熊本バンドの結成をみる。小楠、大平、時雄と結ぶこの徹底した思想の展開は目を見張るものがある。それにひきかえてグリフィスが最善をつくすべく思い切った学制を敷かなかった藩の方針はいかにして為されたのか、興味ある問題が残る。

(三)

いったい小楠がどんな考えを持っていた人かについては先述の『横井小楠　伝記』に教えられることが多いが、ここではグリフィスの小楠観という別の視点から考えてみたい。グリフィスの『皇国』（*The Mikado's Empire*）初版（一八七六年・明治九）のなかでは小楠は出ていない。しかし先述の『日本に於けるラトガース卒業生』は小楠について短く書く。この小冊子は一八八五（明治十八）年、グリフィスが母校ラトガース・カレッジのカークパトリック礼拝堂で大学関係者、同窓生を前に行った演説全文に注を入れ附録をつけたものである。

彼（伊勢佐太郎・筆者注）と「沼川」（三郎・筆者注）は二人とも横井平四郎（横井小楠）の甥であった。横井は王陽明の哲学の熱烈な信奉者であり、福井に於ける講義者でキリスト教に関心を持っていた。一八六

九年、京都で暗殺された。キリスト教信仰の自由と穢多（エタ）と呼ばれる社会からの追放者を市民の身分に上げることを主張したためであった。

一九〇七（明治四十）年、グリフィスは *The Japanese Nation in Evolution* を出版する。この書物は日清・日露の戦争に勝利して世界の強国に伍して行けるまでに発展した日本民族に固有の精神をたどって、グリフィス自身のキリスト教の立場から（牧師とか宣教師とかいうのではない）日本及び日本人の未来に不安と期待を投げかけている。このなかでグリフィスが小楠に言及している箇所がある。その一、小楠は福井に居る時、穢多（エタ）の状態を研究してその身分の向上について思案し、その解放を主張して穢多（エタ）の自由と良心（信仰）の権利のために闘ったが、暗殺者の凶刃の犠牲になって生命を失った。グリフィスは横井平四郎を日本のギャリソンと呼ぶ。ギャリソン（William Lloyal Garrison 1805-79）はアメリカの奴隷廃止論者。その二、陽明学の偉大な師であり、新約聖書（漢訳）の読み手の横井平四郎（初め道徳の教師、グリフィスの雇人の相談役で橋本左内の友）は二人の甥をアメリカに送った。それが後に続く留学生の最初であった。小楠の息子は有能な編集者、国会議員で日露戦争の歴史家である。その三、越前の医師の橋本左内と笠原は改革者横井平四郎、大名春嶽と共に、一八四〇年代にすでに種痘とオランダ医術を強要する意向があった。もし一八六〇年代の福井に薬局、医学校、最良で最新型の人体解剖模型があったら越前は科学で他の藩の指導的役割を果したかも知れない。その四、陽明学は知識と行動を結びつけて考えた。この陽明学の信奉者はほとんど一人残らず幕府に反対した。徳川に忠誠を守るが、ものの正しい見方に不従順ではない者は、外からは科学を受け入れながら内から改革の擁護者になった。越前春嶽、横井平四郎、由利公正、勝安房、大久保一翁のような人が歴史に消すことの出来ない足跡を残した。その五、越前春嶽には側近に由利公正や横井平四郎のような人がした。横井は一八六八年一月三日のクーデター（戊辰戦争・筆者注）の若い指導者の助言者として、国家という船が岩礁と大波を堂々乗り切って進むのを助けた。横井は社会からの追放者を市民の身分に上げることを主張し、良心（信仰）の自由のために最初に弁じた人であった。この二つの日本に於ける最も重大な道徳の勝利が、一八八九年の憲法に取り入れられて、今や日本は西洋の一部の国より先に立っている。政事総裁職になった越前春嶽は横井平四郎と共に江戸の道徳浄化に努めた。時はまだ熟していなかったが、大名は江戸に人質として妻子を置くことから解放された。そして家族と家来をつれて京都に大挙した。

陽明学についてグリフィスは他にも記事と論文がある。

(a) The Cyclopedia Americana (1916), The N.Y. Sun, Nation, the Philadelphia Public Ledger, Bibliotheca Sacra (b) 'The Philosophy of Wang Yang-ming', The Open Court, Chicago, 1916. しかし筆者にはどれも未見のものばかりで、ここでは *The Japanese Nation in Evolution* の陽明学の記述から考えることにする。まずグリフィスは陽明学の本質を次のように解釈する。「人間性の明敏な

知性について無駄話にふけるより一切がこれ神である良心の導きの下で真直に行動に移すことでいっそう真の善を達成することができた」、「心の浄化が学問の最初で主要な点であった」。人生と義務の知性による正当化を渇望する者は中江藤樹（一六〇八～一六四九）、熊沢蕃山（一六一九～一六九一）ら陽明学の教えを教義にした人の書いたものを熱心に読んだ。

王陽明が中世の儒教を変形して個人のためのものにしたこの実際に役立つ原理は日本人の心をその圧制的な社会から解放した。人格の活発な行動性のため信奉者は進んで変化に直面した。その中心の考え方が日本人の解説者によって論争され、擁護されて、やがてそれは知識と行動は矛盾なく直接に結びつかなければならないということであった。重要なことは陽明学の最も発達したのが江戸から最も遠い薩摩、長州、土佐のような藩であった。陽明学の教育を受けた者は物事を有りのままにしておくことを望む人とは心の中はまさに反対であった。この真理が武士の心をつかむや、武士は最高の支配者にたいする尊敬の念に燃え、その支配者唯一人のもとで働く決意に変った。

陽明学についてグリフィスはこうも云っている（『日本に於けるラトガース卒業生』一九一六年）。陽明学を理想主義者の直観主義とみなし、五箇条御誓文の「知識ヲ世界ニ求メ」はそれの実践された言葉である。こう見てくるとグリフィスが福井に招聘されたことが生涯にわたって日本研究を促すほどの強い因果関係を生じたと思わないわけには行かない。すなわちグリフィスはどうして自分が日本に来ることになったのか、そこに何か日本の内なる力が働いていたのではないか。とすればその力とは何か。むしろ糸の先端をたぐるが如く考えを進めた末にぶつかったのが陽明学の存在であった。グリフィスの経験した限りの日本の内なる力は陽明学だということになった。その学問を修めた小楠が熊本にいた。福井には同じく橋本左内がいて、この二人の改革論者はとくに福井藩主松平春嶽の教育、政治面の公務の補佐をつとめた。維新の改革の一つに西洋知識の摂取のために留学、外国人教師の採用の手段が講じられて、その結果がグリフィスの福井藩招聘になった。おそらくグリフィスがここに考えのたどり着くまでに三十数年かかった。今度はそれを足掛りにして日本と日本人を大所高所から誠実にとらえて書き続け、世に問うことになる。

㈣

再び肥後藩からの留学にもどって考えたい。すでに留学の目的について小楠の養子大平のグリフィスが教える学校への大きな期待があった。その依って来たる所については先に陽明学と小楠の思想をグリフィスの解釈から考えてみた。そこで今度は、廃藩を境に動揺した藩校のあり方に注目したい。その鍵を握っていた人物が藩士村田氏寿―巳三郎　文政四（一八二一）年～明治三十二（一八九九）年―であった。何故なら藩の教育のために福井藩は先に横井小楠、後にグリフィスを招聘したが、この実現に最も関与した人物は村田を於て外にないからである。今、村田氏寿手稿『関西巡回記』（編纂者　永井環　三秀舎発行　昭和十五年）のなかの村田自筆の年譜から村田のその面に関する部分を適記する。

一、嘉永四年、熊本藩横井平四郎福井ニ来ル、諸国遊歴ノ為メナリ。識見卓絶、由テ屢々面会、其説ヲ信用ス。

一、安政二年四月三日、此度学問所御取建ニ付学問所詰被仰付。

一、同年五月廿九日、明道館（此時学問所ヲ明道館ト改称ス）講究師被仰付。

一、安政三年九月廿四日、明道館訓導師助被仰付、依之大砲方被免。

一、安政四年七月廿九日、橋本左内江戸留守中、明道館幹事局御用取扱假被仰付。

一、同年八月八日、被召出、明道館御用掛、尤モ武芸所ノ義モ右同様相心得候様被仰付。……此時氏壽文武学校ノ事務ヲ担任シ、

一、安政五年三月、横井平四郎御招被成候ニ付取調掛被仰付。

一、慶応三年五月十四日、異人渡来ニ付右取扱方被仰付。

一、明治二年六月十六日、今度明新館（福井藩学校ノ名）エ文武管轄被仰出候ニ付、厚ク申談候様被仰出。

一、同年十一月廿日、輔弼被仰出。但御取扱大参事同様ノ事。然ル所近来病躰爾々不仕再応御断中ト申、旦右ハ重任ニモ有之ニ付辞退ノ上被免。尚此際軍政学校両局総括被仰出候得共、是又前同様御断申上候所、御聞届ノ上学校掛被仰出。

一、明治三年二月十四日、大参事被仰出、

一、同年十二月、病気ニ付本官御免願書差出候所御差留。

一、明治四年七月、廃藩ノ御達有之、尋テ旧藩知事松平茂昭公御上京、此時氏寿大参事ノ職ヲ奉スル事是迄ノ通。

一、同年十一月廿日、福井県参事ニ任ス。

小楠の福井招聘はたしかに村田氏寿の手柄であった。安政四（一八五七）年、氏寿は春嶽の命を受けて熊本まで小楠を訪ねるが、その切っ掛けは明道館の教育に人材不足、米艦渡来の容易ならぬ事態に苦慮する春嶽が次のような発想の転換をはかったためである。すなわち「肥後横井平四郎其方兼テ心安ク致シ候由其人トナリノ事ハ此方ニモ毎々聞及ビ致承知居候所先日同人ヨリ其方エノ来書家老ヨリ差出候ニ付篤ト致披見候其見識学力ハ是迄聞及ビタルヨリモ感心致スベキ事ニ覚フ」と云うのである。氏寿が小楠と初めて福井で会見したのは嘉永四（一八五一）年のことである。ところが福井藩最初のお雇い教師ルセーと二人目のグリフィスの採用についてはフルベッキの斡旋になったことは知られているが、その一歩手前の外国人教師依頼の端緒になると小楠と氏寿のようには判然としない。ルセーの福井藩との契約は大参事小笠原盛徳、グリフィスの場合は福井地方庁永田大属の間で交された。氏寿は明治三（一八七〇）年に大参事を仰せつかっているが、同年十二月には「病気に付本官御免願書差出候所御差留」になっていた。氏寿五十歳の頃であり、この病気とは二年前に併発した「龍麻知斯症眼痛」のことで、そのためにたびたび辞職を願い出ていたが聞き入れられなかった。そして明治二年には学校掛を仰せつかっている。「氏寿年譜」によるとこの病気は相当に重かったらしく明治四年当初は止む得ず引き籠って養生している。グリフィスが藩校で授業を開始の頃から七月の廃藩までに氏寿は妻雅子の病死と苦難が続いた。それでも廃藩置県の事務引継の仕事に盡力している。この頃から健康の

回復が想像される。グリフィス日記に村田氏寿の名が見えるのはこのことを裏書きしていて、グリフィスが招いた夕食会に千本久信、奈良元作、長崎、橋本綱維といっしょに氏寿も出席した(九月三十日)、放課後、大参議と散歩をした(十月十二日)、夜、五時半から十時まで、村田氏の家ですごした(十月二十七日)、村田ともう一人の大参事が、今日二時間学校にいた。(十二月二十七日)、大野で殺した猪の足を村田がことづけてくれた(十二月二十八日)、そして翌年の一月十六日からグリフィスが福井を去る二十二日の一週間はとくに契約の問題で村田氏寿なしの日はない。そのことについて書くのが小文の大きな目的の一つである。しかしその前に福井の小楠に最も身近な立場にいた氏寿が後に記した小楠論を「年譜」から引く。「横井氏学力識見古今ニ超絶ス其説人ノ意表ニ出テ其鎖国ノ旧習ヲ脱シ専ラ開国ノ論ヲ唱ルノ類、当時聴クモノ之ヲ怪シマサルモノナシ。後悉ク其説ノ如クナラザル事ナシ、衆初メテ之ヲ信シ又疑フモノナシ」当時、四十歳前後の氏寿に小楠の説がラジカルに思えただろうが(今は小楠の思想にまで立入ることは出来ないが)、それから学ぶ気持のあったのは村田氏寿の藩政にかける大きな心意気のあったことを物語る。慶応三年の「異人渡来ニ付右取扱方被仰付」に異人渡来とあるのは何を意味するか分らないし、取扱というのも何をするか分らないが少くとも氏寿が外国人に関する仕事にかかわりを持っていたことは明白である。それにしても明治二年、福井の藩校に外国人による英学教授という新機軸の教育方針が打出された。しかし小楠の思想の流れを汲む熊本洋学校と違ってそれが外国人教師による徹底した英学中心の学校となるまでには行かなかった。それはすでに中心となるべき村田の年令、体力が一歩も二歩も後退していたことにも大きな理由があった。「氏寿年譜」に藩お雇いのルセーとグリフィスが全く記録されていないのは村田にとって遺憾なことと思わざるを得ない。

(五)

それでいて大参事村田は最後までグリフィスの最も信頼する役人であった。グリフィス「福井滞在日記」の一八七二(明治五)年、一月十一日、昼食後、県庁へ呼ばれ、大参事と長い間話す。彼はグリフィスに福井に居てもらいたいという県庁側の希望と、それに関連して、福井住民の願いを再び述べる。一月十六日、村田へ一月二十三日に福井を離れたいという手紙を書いて大岩に持たすが、村田がいそがしくてその手紙を持って帰る。一月十七日、学校でいつもの講義のあと、県庁で村田と一時間半話す。夜七時に村田の公文書を受取りその返事を書く。一月十九日、二十一日午後五時、愛宕山の茶屋で大参事らとの会合に招かれる。一月二十日、村田から立派なみやげをもらう。五時半、大参事が食事をしに来る。食事は話をしたりして楽しいことばかり。グリフィスはまた福井に来ると約束しようと思ったが、しなかった。八時半、村田は上きげんですっかり満足して帰る。一月二十一日、愛宕山の茶屋へ行く。十四〜八名が出席し楽しい純日本風な会、十時半に帰る。一月二十二日、村田が別れのあいさつに来る。

次に一月十七日の日記にある村田に宛てたグリフィスの手紙の全文を紹介したい。

(草稿・ラトガース大学グリフィス・コレクション蔵)

村田殿

新生福井　日本の十二月九日
（太陽暦明治五年一月十八日）

拝啓

八日付（一月十七日）の貴殿の手紙を拝受いたしました。その手紙が非常に注意深く英語に直されるのを聞いて、貴殿が私に要求する内容を熱心に検討しました。

私がお願いした今月十四日（一月二十三日・筆者注）に福井を離れることで、学校の授業が中断され、生徒が失望するのはとても残念です。しかしどうぞ忘れないで下さい。私は福井に来てから学校と生徒のために私のすべてを、私の時間と技能、日夜、健康な時も元気のない時も、福井の人の忠実な召使になるよう努めてきました。ですから私が休息や休暇を願っても許されると思います。三、四ヵ月前、私は米国、横浜、江戸の友人と静岡の一友人に一月初め（陰暦・筆者注）横浜に居ると手紙で知らせました。今、その約束を果し、横浜での緊急な仕事につかなければなりません。こういうわけで私を行かせて下さい。横浜まで適当な護衛もつけて下さい。しかし護衛がなくても一人で行きます。

福井に居る間、大へん折目正しく親切にして下さった役人の方方と意見を異にするのは大へん辛いと思います。私は外国人ですが、人の親切を忘れない心はあります。役人の方方の意志に逆らって福井を離れても、私にかけて下さったこれまでの親切は忘れません。

私が急に福井を出て行くと思わないで下さい。三、四ヶ月前から私は今頃離れることになると知っていましたし、友人も知っていました。私が急いで離れると言われるのは理解に苦しみます。どうぞそうは思わないで下さい。文部省の役人も私が一月一日（陰暦―筆者注）前に江戸に居ると知っています。ずっと前、まだ廃藩になる前から、東京でフルベッキ氏に私が江戸に移ることのあるかも知れないと知らせましたので、フルベッキ氏はそのことを役人に教えていたからです。

貴殿が断固として私に居てほしい気持に感服します。藩が多額の費用を使い、骨を折り、誇りにしてきて、今になってすべてが破壊されると貴殿は思われるが、私以上でなくても、同じくらいの良い教師が必ずいます。私の仕事が中断するのも見たくないので、たとえ礼を尽して解雇されても私は東京の役人が学校を存続するよう極力努力します。貴殿が望まれるなら、文部省に良い教師を入れて学校の存続を頼む手紙をすぐにも喜んで書きます。

すべてこういうことで私は役に立つよう、自分を忘れ、感情に従うことなく県への義務に従って行動するよう努めました。私は米国でも今、貰っているのと同じくらいの俸給の良い職を捨てて、私の教えた日本人学生十三名の熱心な要請で日本に教えに来て、福井へ来ました。貴殿の友人であり私の友人のフルベッキ氏が私にそう望み、彼が提案して気持よく一ヶ月分の俸給をいただきました。福井へ来るまでの準備と旅に二ヶ月を失いましたが。今、私は大日本に尽し、日本の文明化の大事業を助けるよう

に呼ばれています。私にここよりもっと大きな仕事があり、福井のすべてが変った時、貴殿はどうして私にとどまれと命じられますか。貴殿は古い人間ではなく、私に共感できるので、貴殿も私のように見てくれるようにお願いします。自分が正しいと心ひそかに感じます。どうぞ一人で、面目なく横浜へ行かせないで下さい。私が大酒飲みや淫売屋でしたら、貴殿はよろこんで私を追い払うでしょう。どうぞ私を貴殿の召使よろしく遇して下さい。東京へ行って役人に福井の学校を続けて下さいと頼みたい、私の仕事があとかたもなく消え去るのは見たくないのです。

ですから私を強情と思わないで下さい。私は福井の誰一人にも不快な感情は全くありません。しかし一人でも護衛つきでも、面目なしにでも、礼を尽くされても、今月十四日には福井を離れなければなりません。たとえ福井へ戻る戻らないにしても、雪に逆らおうと、ひどい目にあおうと、成功しようとも。何ヵ月も楽しみにして待っていたことを行うことにはっきりした自覚を持ってします。そして多くの淋しい時に元気づける働きをしてくれた思い出を持ってその仕事をするでしょう。どうぞ私の要求をお許し下さるようお願いします。私をして厳しく扱われることなく、慈父の心を持って、よろしくお願いします。

化学教授　W・E・グリフィス

この手紙は通訳の岩淵によって誤りなく村田に伝えられた。おそらくさすがの村田もこのグリフィスの心情の吐露に折れたのだろう。翌日は二十一日の送別会の招待、その前日、村田から立派な美しい日本の象眼の小さくて低い机をもらった。その日、グリフィスの家へ食事に招かれた村田はすっかり満足して帰った。グリフィスと村田の間の論争のことはグリフィスの福井からの手紙に詳しいが、別の機会に述べることを約束して、ここでは最小限でそれらの手紙で村田についてのグリフィス評を書き留めておこう。「鋭い知性を駆使して数え切れない議論を出す洗練された日本の役人」、「白山のような意志を持つ堅い決意と強い意志の人」と云うのであった。

この小文は初めに肥後からグリフィスの科学の学校に留学した青年の居たこと、次にそれは横井小楠の義理の息子大平の勧めによるものであったこと、その大平は熊本にグリフィスと同じアメリカ人教師の洋学校を創設したが、福井の藩校と洋学校は異る面があり、そういう英学の導入には横井小楠の思想が影響していたこと、さらにそういう働きの大きな原動力の一つに陽明学のあったことをグリフィスの著書から考えてみた。そして、福井では小楠とグリフィスの二人の優れた教師を招聘したその陰でもっとも力があり、かつ、努力を惜しまなかった人物に役人大参事村田氏寿のあったことを強調したかった。歴史の情勢の水面下にあって村田自身が自筆の略伝に全く記さなかった事実をその水深まで下りて考えてみた。しかし村田を中心とする藩校役人に外国人教師を擁しての教育の近代化への真の覚醒があったかと云うと疑問である。